

政策無し選挙運動と SNS

兵庫県の斎藤知事の再選に驚いた人は多いだろう。選挙は政策論争ではなく、斎藤知事の政治家としての適正を問うものであった。衆議院総選挙も政策論争は不在であり、与党への信任投票のレベルに収まってしまった。兵庫県知事選挙をめぐって、大手メディアと SNS の対立が浮き彫りにされたが、選挙戦に影響をあたえた SNS について、うんざりするほどの報道が続いている。公選挙法違反疑惑の報道も連日で、大手メディアの斎藤知事へのバッシングは容赦がない。

確かに今回の選挙で SNS の果たした役割は大きかった。斎藤知事は不適格かと思っていた有権者は、もともと知事の実績を支持していたので、SNS の斎藤知事擁護説に抵抗なく同意した。そんな感じと思う。政策論争なき選挙の成れの果てと言うことだろう。衆議院総選挙も同じだった。

そもそも何が問題であったのか。斎藤知事のパワハラやおねだり疑惑、内部告白への対応と問題は明らかであったが、事実関係は明確ではなかった。にもかかわらず、兵庫県議会は全会派一致で知事不信任案を議決した。百条委員会や第三者委員会の事実認定を待たずして、世論の波に押されての勇み足だった。故に、斎藤知事の善悪説に、とりわけ「斎藤知事は悪くない」のうねりを助長させた感が強い。したがって、斎藤知事が県民の支持を得たからと言って、疑惑が晴れたわけでもない。あくまでそう思っている県民が多いと言う結果に他ならない。県議会は再度不信任案を提出したらどうかと思ってしまう。

事実をもとに検証し判断することは、基本原則であることは言うまでもない。事実がはっきりしない中での解決は、賛否両論者の分断を助長する結果に終わる。街頭演説の斎藤氏に『サイトウ！サイトウ！』と連呼していた人たちの姿に、政策なき選挙運動の哀れみを見た気がする。

この問題は政治の世界だけにとどまらない。私の相談室に来られるいじめ問題の相談にもあり得ることである。いじめの事実関係が十分に明確にならないうちに、学校は善悪をジャッジしている例が多い。それはいじめられた側にもいじめた側にも寄り添えない表面的な解決となる。もうこれで仲良くしようよという握手にだれも納得はしていない。

斎藤知事選挙問題はまだ報道が続くだろう。本当の事実が明らかになっていないのだから、評論家の予測に基づくコメントで報道時間が費やされることに失望している。元プロレスラーの高田延彦が、広告会社女社長に「出てこいやー！」と叫んでいるかも(笑)

(丹羽 豊)